

# 道 どうひょう 標

*d o h y o*

年間特集 「おそれ」

第二回・「怖れ」は宗教的観念の土壌である 小松 和彦 さん

連載

あなたのいのちの物語 絶望の淵に希望をもたらすもの

伝承を科学する コトバ・フシ・ウタ

道しるべ 「墓じまい」から「仏檀じまい」へ

2020 春季号



## 年間特集

## 「おそれ」

第二回 小松和彦さん

「怖れ」は宗教的観念の土壌である

## 「死」と宗教的観念

広い意味での宗教的観念は、人間がもつとも怖れることⅡ「死」というものに考えをめぐらすようになったことで生まれたといわれています。死は遅かれ早かれ誰にでもあります。死を避けたい人も必ず訪れます。この避けがたい死をどのように受け入れるか。人

類が見出したその受け入れの方法が、「肉体」とは異なるもう一つの存在、すなわち「たましい」というものを想定し、「たましい」は死なないという考えでした。そう思うことで、死を受け入れ、乗り越えようとなりました。それでは、その「たましい」はどこに行くのでしょうか。そこは、

生きている者たちの世界とは異なる世界、すなわち生者には見えない、生きてながらには行けない世界でした。そのような世界は文化や民族、時代によって細部は異なりますが、原始的な時代の人びとは、そこも人間世界と同様の世界であって、先に死んだ父母や兄弟、親戚たちが、生きていたときと同じように一緒に生活している所と考えたようです。そう考えると、死は楽になります。そこで先に亡くなった家族や友人たちが待っているからです。行くのが早いか遅いかの違いでしかありません。死は通過点にすぎず、「たましい」としてなお生き続けているのです。

ところが、気がかりなことがありました。そこが楽しい所ならばよいのですが、苦しい所では困ります。こちらの世界で悪逆非道を重ねた者と一緒に生活したくはありません。あの世でもまた一緒に

と嘆く夫婦もありそうです。そうした観念をまとめるかたちで生まれたのが、善人と悪人とで越く世界が違おうという死後観です。日本では仏教がこうした死後観を持ち込みました。極楽と地獄です。

## 「怖れ」を軽減するために

いっぽう、この世では、「良いこと」ばかりでなく、死を含め生者たちを苦しめる病氣、飢え、災害など、様々な「怖ろしいこと」Ⅱ「災厄」も絶え間なく襲ってきました。そして、その原因を既知の知識では説明できないときも、見えない領域に棲む「たましい」との関係の有りかたで説明しようとなりました。しかし、ここでもまた、やっかいなことが生じました。「幸福」をもたらししてくれる「たましい」はありがたいのですが、不幸をもたらす「たましい」は回避したいという思いです。そこで、「好ましいたましい」を「カミ」

## 災厄の原因を説明できない「やわい」

## 「妖怪」が生まれた。

として祀り、災厄をもたらす「邪悪なたましい」を「アラタマ」とか「モノノケ」「アヤカシ」「魔物」などと呼んで忌避・排除しようとしてきました。後者が今日では「妖怪」と呼ばれているものたちです。私たちは、目に見えないものを怖れます。それがどこにいて、どんな姿をしているのかわからないからです。そこで私たちの先祖は、「カミ」にせよ「妖怪」にせよ、その姿かたちを探り出そうと努力



## 現代人が図像化、擬人化した「好ましくないもの」の姿かたちは驚くほど昔の妖怪たちに似ている。

を重ねた末に、その姿を絵画や彫刻に留め、さらには儀礼や芸能の対象・素材にまでしました。そうすることで、妖怪を回避・排除することが容易になり、怖れを軽減することができると思ったからです。

### 現代人にとつての「妖怪」

私たち現代人の生活においても、その生活を脅かすものは、規模には違いがあるにせよ、たくさんあります。それらは、身体の外部や内部から、あるいは社会の外部から、あるいは内部から、襲ってきます。もはやそれらの原因を「カミ」とか「妖怪」に求めることは少なくとも、異常気象は地球温暖化のせいだ、疫病はウィルスのせいだ、地震や津波は海洋プレートが大陸プレートの下に移動したせいだ等々、科学的に説明されるよ

うになりました。

しかしながら、今でも、科学的を装った現代的表現、つまりラベル貼りがなされてはいるものの、そのラベルを剥ぐと「原因不明」という文字が出てくるものはたくさんあります。「ストレス」などというものはその最たるものであつて、かつての「アラタマ」や「もののけ」「悪霊」と、役割的には大差ないようにも思われます。

さらにいえば、目に見える見えないにかかわらず、そうした「好ましくないもの」を、現代人たちも図像化し擬人化する傾向があります。テレビを見ているとわかります。その姿かたちは驚くほど昔の妖怪たちに似ています。おそらく、そうすることでやはり「怖れ」を理解し、軽減し、制御しやすいと思つているからなのでしょう。

だとすれば、現代でも、「見えないもの」＝「怖いもの」の

なかに、宗教的観念が生まれる土壌があり、また「たましい」をめぐる文化や「妖怪」の文化から受け継いだものがある、ということになるのではないのでしょうか。上述のような広い視野からの「日本における怖いものの文化史」の構築の必要を痛感します。

### 小松和彦（こまつかずひこ）

国際日本文化研究センター所長。専門は、民俗学・文化人類学。1947年東京都生まれ。東京都立大学大学院社会科学科博士課程単位取得退学。信州大学助教授、大阪大学文学部助教授及び教授を経て、1997年より国際日本文化研究センター教授。2012年4月より現職。1979年第10回澁澤賞（公益信託澁澤民族学振興基金）受賞。2013年紫綬褒章受賞。2016年文化功労者顕彰。著書は、『神々の精神史』（講談社学術文庫）、『憑霊信仰論』（講談社学術文庫）、『異人論』（ちくま学芸文庫）、『妖怪学新考』（小学館ライブラリー）、『いざなぎ流の研究』（角川学芸出版）、『呪いと日本人』（角川ソフィア文庫）など多数。

Your Spiritual Stories  
あなたの物語  
いのちの物語

10話目

「絶望の淵に

無限の希望を

もたらすもの」

アンデルセン「天使」

「人魚姫」や「マッチ売りの少女」と通いあうアンデルセン（一八〇五―一七五）の掌編。<sup>しょうへん</sup>

よい子供が死ぬと天使がこの世においてきて腕に抱きあげ、その子が好きだった方々の場所に飛んで行く。死んだ子は天使に連れられ、好きだった場所で手にいっぱい花を摘んで、神様のところに持っていく。すると花はますます美しくなる。神様はどの花も胸にあてて、一番好きな花にキスをする。その花は声が出るようになり、みなで大きな祝福の歌をうたうようになるのだという。

さて、ある子供が死んだ。迎えに来た天使がその子を故郷の花園に連れて行き、たくさんの花を摘む。ところが、この天使はその子をがらくたの集まった横丁にまで

連れて行く。天使は植木鉢のかけらとこぼれた土を指さす。そこにひからびた野の花があった。天使と子供はそのひからびた花と土とがらくたも拾って行く。

なぜか。天使は語る。その横丁の低い地下室に貧しい病気の男の子が住んでいた。やっと松葉杖で歩けるぐらいで、病床から離れられる時間はわずかだった。ある日、隣の子がブナの枝をもってきてくれた。男の子は枝を頭の上にかざし、お日様が輝き、小鳥のさえずるブナの林の中にいるのを夢見ることができた。

隣の子は別の日には根のついた野の花をもってきたので、それを植木鉢に植え、枕元の窓のところに置いた。その草は育ち、毎年花を咲かせるようになった。男の子はできるだけの世話をし、花は夢の中でも育っていった。男の子は最期るときも、その花の方を見ながら死んでいった。

ところが一年後、その花はがらくたのなかに捨てられてしまった。天使が拾ったのはこの花と土とがらくたなのだ。「というのは、この花は、女王様のお庭の中



の一番美しい花よりも、もっと大きな喜びをあたえてくれましたもの。」子供がたずねる。「でも、どうして、そんなにくわしく知ってるの？」天使は「知っていますとも！」と答える。「松葉杖にすがって歩いていた、その病気の小さい男の子というのは、じつはこのわたしだったのですよ！わたしの花だもの、どうして知らないはずがありませんよ。」

神様がこの子を迎えると、その子には羽が生えて天使になり、天使と子供は二人で手をつないで飛び回った。神様はすべての花を胸にあて、あのみすばらしいひからびた花にキスをした。するとその花は声が出るようになり、死んだ子供やすべての天使たちといっしょに歌い始める。捨てられたが

らくたも含めて、無限の彼方にまで広がるような輪ができて、皆が歌い舞った。

苦しみに耐えて生き、死んだ子供の魂。その魂を支え夢見る糧<sup>かた</sup>となった「花」があった。その花は死のときまで希望であり続けた。それはとても小さく見えても、その働きは限りなく大きい。絶望の淵にあっても、小さな花の力で無限の喜びを思い描くことができ。希望はひからびて見捨てられることもあるが、新たに見出されて絶望の淵にある子の心を喜びで満たす。そう告げる物語は、それ自身小さな天使のようでもある。

### 島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを、つくって。もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

# 伝承を科学する

## コトバ・フシ・ウタ

本願寺は、室町時代から現代にいたるまで、能楽をあつく保護してきた。主な理由は、茶道と並んで能楽が、上層階級の社交手段であったことであるが、もう一つの理由は、能楽の物語やその表現方法の中に、日本の仏教と通じる要素があったことである。能楽と聞いてすぐに連想されるのは、独特の表情をもった面、刺繍をふんだんにほどこした豪華な装束、そして主人公の舞う姿などの、視覚的な要素であろう。しかし、主人公の舞を支え、物語を進行させているのは、じつは目にはみえない、聴覚的な要素である。

仏教においても、寺の荘厳や仏像など、視覚的要素がクローズアップされることが多いが、じつは嗅覚として聴覚的要素が、法要では必要不可欠である。聴覚的要素といえは楽器や法具の音が思い浮かべられるかもしれないが、やはり中心にあるのは、僧侶の声で唱えられるもの、音としての言葉である。音としての言葉を大切にする点において、仏教と

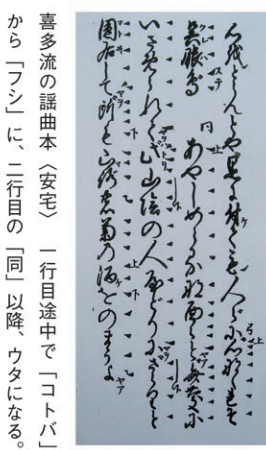
能楽は互いに通じ合っている。

能楽という演劇の音楽構成にふれ、仏教との結びつきをさらに確認したい。能楽の台本は、謡あるいは謡曲と呼ばれる。謡曲は、演劇の場面に合わせて複数の段に分かれるが、それぞれの段のはじめには、登場人物が名乗り、場面や状況を語りたりする言葉、いわば演劇のセリフのような言葉がおかれる。その部分はコトバ（詞）と呼ばれ、聞けば謡曲だとすぐにわかるような特別な抑揚で発音される。

謡曲の一段はさらに、コトバからフシ（節）のある部分へと進んでいく。フシのある部分の言葉は、主に七五調で作詞される。「フシ」と呼ばれることからわかるように、その部分には、単純ではあっても音の高さのはっきりした旋律がつけられている。また大鼓や小鼓などの打楽器の伴奏も、この部分から加わる。打楽器の伴奏は「ヨー」や「ホー」などの掛け声をともなった八拍子のリズムである。謡曲のフシと、八拍

子のリズムは、お互いに拍を合わせることなく進むのだが、クライマックスになると、謡曲は、打楽器の八拍子のリズムに合ったウタ（歌）に移っていく。一段は必ずウタで終わる。ウタは独唱ではなく、複数の同音で歌われることが多い。

この音楽構成の原点は、おそらく仏教の講式にある。たとえば比叡山の横川で毎年六月十日に行なわれている六道講式。六つの段のそれぞれが、旋律のついた式文の独唱ではじまり、同音による伽陀（拍子に合った歌）に流れ込む。式文は、謡曲のコトバやフシと同じ役割をはたしている。つまり意味の伝達が中心である。そして伽陀は、謡曲のウタの部分同様、情緒や気分を高揚させる部



喜多流の謡曲本（安宅） 一行目途中で「コトバ」から「フシ」に、二行目の「同」以降、ウタになる。

分であり、それが一段を締めくくる。コトバからフシ、フシからウタ、という音楽構成は、仏教と能楽をつなぐ大きな要素のひとつである。それを今一度、図に示しておこう。

コトバ（特別な抑揚）



フシ（旋律）+ 打楽器の八拍子



ウタ（拍子に合う、同音）

藤田隆則（ふじた・たかのり）

1961年山口県生まれ。大阪大学卒業。博士（文学）。京都大学助手、大阪国際大学助教授、ミシガン大学招聘教授をへて、現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。専攻は、民族音楽学。主な研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能の多人数合唱』『能の地拍子研究文献目録』『日本の伝統音楽を伝える価値―教育現場と日本音楽』『能のノリと地拍子―リズムの民族音楽学』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。

天岸浄圓 (あまぎしじょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。

「墓じまい」から

「仏壇じまい」へ

〈彼岸に家族がそろって墓参り〉の光景が昔語りになりそうだ。「墓じまい」の言葉が一般化し、それに伴う再納骨の量が増大し問題となっている。納骨なのか遺棄(遺骨じまい)なのか。さらには「仏壇じまい」の語も一般化し始めているようだ。家族の形態、生活環境の変化も理解できるが確実に家庭で手を合わせる場がなくなる。

先日、新聞の読者の意見欄に「仏壇じまいに賛成」の声があった。「故人を偲ぶには仏壇でなくてもよい。それぞれの偲び方があってもよい」という内容だ。多くの人びとには「仏壇」は「故人」を偲ぶためのものであった。そこには「仏さま」を拝むという意識は具わっていない。

わが国は仏教国という。しかし「仏さま」を拝むことを忘れた仏教とはいかなるものか。「死者供養」を追いかけ、メディアを通じて「金運パワースポット」を声高に叫ぶ僧侶、どこに仏陀の精神が生きているのか。

親鸞は自身の事柄を語らなかつた。

ただ、残された法語は人びとに強い響きを与える。中でも『歎異抄』の表現は格別と言える。その一つに、

親鸞は父母の孝養のためとして、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。

という言葉がある。この言葉だけを聞くと、親鸞は死者供養を厳しく拒絶したかに思われる。だが親鸞はつづけて、

そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

と語っている。

供養すべきは自分の父母だけではない。生きとし生ける全てものにおよぶべきだと言う。彼はそれほど豊かな命の中を生かされたのである。その実感がなければ出ない言葉である。

仏壇を「故人」「個人」を偲ぶ場としている人びとに、あらためて豊かな「自身」の命を知る場としての意味を発信すべきと思う。

編集後記

このほどアカデミー賞4冠を達成した韓国映画『パラサイト 半地下の家族』は、格差社会を描いた物語だ。悲惨な境遇にある家族の「計画を持たないこと」が、一番良い計画だ」という台詞に胸を締めつけられた。緻密な計画を立てても、計画にはなかつた出来事が次々に起こり、あれよあれよという間に、気がつけばまったく予想だにしていなかつた地点に立っている。だから計画を立てても無駄だ、というのである。

僥倖によって計画以上のものが手に入ることもあれば、災厄によって計画が台無しになることもしばしばある。なぜ、いま、私の上にこのような出来事が起こつたのか、その原因がわからないとき、ひとは出来事の背後に「カミ」や「モノケ」を見てきたのだろう。

世界は複雑にできている。いかに世界の構造についての科学的理解が進んでも、人生に立ち現れる一つひとつの出来事の原因を特定することはできない。世界の不可解さが宗教性への入り口だと小松先生の記事を読んで感じるところである。そして計画通りにいかない人生の中で、遠大な計画を立てる勇氣と希望を与えるのが本当の宗教なのではないだろうか。

(釈圓眞)

仏壇仏具のことは  
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007  
ホームページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)  
〒543-0062 大阪市天王寺区達阪2丁目1-12  
(四天王寺西門交差点 西へ30m)

降誕

表紙の絵

マーヤ夫人は出産のためインドの風習にのっとり里帰りする途中で陣痛を起し、ルンビニ園で太子を出産された。仏伝には七歩歩まれて、「天上天下唯下独尊」(この世の中では私は私ではない)と言われたという。これも象徴的なたとえ話であるが、太子がマーヤ夫人の右脇の下から生まれられたとされることも同じく、当時のインドのカーストではバラモンは頭部から、王侯、貴族、武人階級は首下から胴で、平民は股間、奴隷階級は足の甲から生まれるとされていたことによる。王族の太子は脇の下が陰部に近く見えるのでそういう象徴的な表現になっている。

畠中光亨(はたなか こうきょう)

日本画家/インド美術研究者  
/真宗大谷派僧侶